

## 広島大学地区およびイーストカロライナ大学地区での活動と交流（第2年次）

広島地区・ECU地区コーディネータ

広島大学大学院教育学研究科 講師 朝倉 淳

### (1) はじめに

1999年5月から3ヵ年計画でスタートしたグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト(Global Partnership Schools Project: GPSP)は、2年次も日本側3地区(大阪教育大学地区、鳴門教育大学地区、広島大学地区)、米国側3地区(イーストカロライナ大学: ECU地区、ノースカロライナ大学ウィルミントン校: NCUW地区、ウェスタンカロライナ大学: WCU地区、いずれもノースカロライナ州)において、初年次とほぼ同様の形で活動と交流が実施された。ここでは、本プロジェクトの広島大学地区・ECU地区コー

ディネータの一人であり第2年次の米国訪問に同行した筆者が、2年次の活動と交流の状況を中心に報告する。

### (2) 広島大学地区の組織

広島大学地区では、1999年5月18日に学校教育学部(2000年4月より旧教育学部と統合し現在は教育学部として一本化)国際交流委員会のメンバーを中心とする以下の研究会をつくり、本プロジェクトの推進にあたることとなった。

名 称	広島グローバル・パートナーシップ・スクール研究会		
組 織	会 長	小 篠 敏 明	
	顧問研究員	濱 口 脩 烏 越 兼 治 小 原 友 行	
	専門研究員	深 澤 清 治 神 山 貴 弥 朝 倉 淳	

研究員の役割 会長および顧問研究員は、プロジェクト全体の進行を指揮し、必要に応じてアドバイス等を行う。プロジェクト推進の実務は専門研究員があたる。専門研究員の実務分担は概ね以下に示すものとする。

米側大学関係者との折衝、英文報告書の作成等に関する実務	深澤 清治
日本側大学関係者との折衝に関する実務ならびに研究会内実務	神山 貴弥
受入および派遣についての各学校、教育委員会等との交渉に関する実務	朝倉 淳

### (3) 2000年度米国教員の受入

6月15日から7月2日の日程で、米国教員が日本に派遣された。そのうち6月23日から29日の期間において各大学地区での研修(各地区、米国の小中高教員計7名、大学コーディネータ1名)が実施され、7月1日には大阪教育大学においてサマリーミーティングと送別会が行われた。

#### ① 受入校と配属の決定

学校間のパートナーシップ樹立の趣旨から、米国教員の所属校とすでに交流がある学校を優先して受入校を選定し、受入を依頼した。その結果、以下のような

形で受入られることとなった。なお、ECU地区・広島大学地区米国側コーディネータDr. Helen Parke、米国側ディレクタDr. Donald Spenceは、随時各参加者に同行することとなった。

東広島市立御薮宇小学校

Ms. Faye Nelson, Virginia Williamson E. S. (NCUW)

広島大学附属東雲小学校

Ms. Summer Lewis, Clyde E. S. (WCU)

広島大学附属三原小学校

Ms. Cheryl Adams, Wahl Coates E. S. (ECU)

および広島大学附属三原学園幼小中一貫教育研究会へ全員が参加

広島大学附属東雲中学校

Mr. Eric Westendorf, Exploris M. S. (ECU)

広島大学附属三原中学校

Ms. Shawna Andrews, Mr. Scott Tiernan, Martin M. S. (ECU) および広島大学附属三原学園幼小中一貫教育研究会へ全員が参加

広島県立井口高等学校

Ms. Marie Satz, New Bern H. S. (ECU)

広島県立祇園北高等学校

参加者全員が訪問

## ② 広島大学地区での受入期間の日程

6月22日(木)

広島市内および宮島にて文化研修(広島アステールプラザ泊)

6月23日(金)

広島大学附属三原学園幼小中一貫教育研究会へ全員が参加(広島アステールプラザ泊)

6月24日(土)

昼食会 広島市内から東広島市への移動(広島大学山中会館泊)

6月25日(日)

広島県内日帰りツアー(広島大学山中会館泊)

6月26日(月)

午前:広島大学学校教育学部長(田中春彦教授)表敬訪問

午後:広島県立祇園北高等学校訪問(広島大学山中会館泊)

6月27日(火)

各配属校を訪問(広島大学山中会館泊)

6月28日(水)

各配属校を訪問(広島大学山中会館泊)

6月29日(木)

各配属校を訪問

広島大学地区レセプション(広島大学山中会館泊)

6月30日(金)

大阪へ移動

## ③ 受入に関する成果と課題

受入校等の協力を得て、大きなトラブルもなく、パートナーシップづくりにむけての活動・交流が実施された。米国側教員、受入校・日本側教員の双方から活動・

交流の成果が得られたことが報告された。東広島市立御園字小学校においては、この受入期間内にVirginia Williamson Elementary Schoolとの姉妹校提携を進めるための協定書に調印・署名することができた。

主な課題としては、次の2点である。一つは、より運営を円滑にして多くの成果をあげるために、受入開始までにできるだけ多くの情報を交換する必要があることである。外国との意思疎通にはいろいろな困難が伴うが、情報の環境整備を図っていくことが求められる。2点目は、ホームステイの実施である。米国側や日本側の他地区ではホームステイが実施され成果をあげている。ホームステイは貴重な体験であり、そこから得るものも大きいので、3年次の受入では広島大学地区においてもこれを実施したい。

## (4) 2000年度日本教員の派遣

2001年3月23日から4月5日の日程で日本側教員が米国に派遣され、そのうち3月23日から3月31日の期間において各大学(ECU, NCUW, WCU)地区での研修が行われた。

ECU地区	日本の小中高教員6名 日本側コーディネータ2名
NCUW地区	日本の小中高教員7名 日本側コーディネータ1名
WCU地区	日本の小中高教員8名 日本側コーディネータ2名

4月1日には、日本側訪問団全体と米国側3地区の代表者によるサマリーミーティングと姉妹校提携協定書調印式およびレセプションが行われた。翌4月2日には、ラーレにおいて教育施設等訪問が行われた。

### ① 派遣校・派遣教員の決定過程

派遣校・派遣教員の決定過程は基本的に前年次と同様とした。広島大学学校教育学部と関係の深い広島大学附属東雲小学校・中学校、広島大学附属三原小学校・中学校から、各校1名、計4名を募集した。東広島市からは、東広島市教育委員会に依頼し、小学校もしくは中学校から1名を募集した。広島県からは、広島県教育委員会に依頼し、広島県立高等学校2校から各1名計2名を募集した。

各附属校および東広島市教育委員会からは、11月末までに、派遣教員の推薦を受けた。また、広島県教育委員会からは12月末までに派遣教員の推薦を受けた。

広島グローバル・パートナーシップ・スクール研究会において、推薦された教員を参加者として決定した。結果的には、すべて前年次と同様の学校からの派遣となった。決定された参加者および派遣先は次のとおりである。

東広島市立御薮字小学校 教諭 小池 周  
Virginia Williamson E. S. (NCUW)  
広島大学附属東雲小学校 教諭 川上 公範  
Jonathon Valley E. S. (WCU)  
Clyde E. S. (WCU)  
広島大学附属三原小学校 教諭 見藤 孝二  
Wahl Coates E. S. (ECU)  
広島大学附属東雲中学校 教諭 三樹 正典  
Exploris M. S. (ECU)  
広島大学附属三原中学校 教諭 今川 卓爾  
Martin M. S. (ECU)  
広島県立井口高等学校 教諭 西木 豊  
New Bern H. S. (ECU)  
広島県立祇園北高等学校 教諭 松崎 親男  
Rose H. S. (ECU)

② 広島大学地区の派遣事前学習会・事後学習会

広島大学地区で行われたGPSP事前学習会・事後学習会の日程およびその主な内容は以下のとおりである。

第1回事前学習会 2001年1月27日(土)

参加者および事務局構成員の自己紹介  
プロジェクト概要の説明と質疑応答  
個別研究・共同研究の趣旨説明と質疑応答  
報告書の作成についての説明と質疑応答  
諸手続きおよび諸連絡

第2回事前学習会 2001年3月10日(土)

学校紹介および個別研究・共同研究の計画の交流  
報告書の内容・書式等、作成に関する説明  
各校配置と現地スケジュールの説明  
現地の地理と生活についての説明  
諸手続きおよび諸連絡  
昼食会と前年次参加者との交流

学習会自体は2回であるが、この間Eメール等を通じて、連絡や協議、打診等を行った。

③ ECU地区を中心とした派遣期間の日程

3月23日(金)

大阪にて第2年次訪米全参加者による直前学習会

3月24日(土)

関西空港より離日  
シカゴ、ラーレを経由して、ノースカロライナ州グリーンビル到着

3月25日(日)

ウェルカム・パーティー

3月26日(月)

ECU教育学部長表敬訪問(副学部長と面会)  
ECU国際交流課を訪問  
Martin M. S., Wahl Coates E. S., New Bern H. S. を訪問

3月27日(火)

各校訪問  
広島大学附属三原小学校  
教諭 見藤 孝二 Wahl Coates E. S. (ECU)  
三郷町立三郷北小学校(大阪教育大学地区)  
教諭 小阪 昇 Wahl Coates E. S. (ECU)  
広島大学附属東雲中学校  
教諭 三樹 正典 Exploris M. S. (ECU)  
広島大学附属三原中学校  
教諭 今川 卓爾 Martin M. S. (ECU)  
広島県立井口高等学校  
教諭 西木 豊 New Bern H. S. (ECU)  
広島県立祇園北高等学校  
教諭 松崎 親男 Rose H. S. (ECU)

3月28日(水) 各校訪問

3月29日(木) 各校訪問 レセプション

3月30日(金) 各校訪問

3月31日(土) ホームステイほか

4月1日(日) ラーレに移動 夕食会

4月2日(月)

サマリーミーティング  
姉妹校提携協定書調印式 レセプション

4月3日(火)

Exploris M. S. およびExploris Museum訪問、  
教育機関・州議会等訪問

4月4日(水) ラーレからシカゴ経由で離米

4月5日(木) 関西空港に到着

④ 米国訪問に関する成果と課題

各参加者は、全体の日程を通じて、また各校での活動・交流を通じて、各自の国際理解を深めることができた。また受入校の教員や児童・生徒からも国際交流、

国際理解が深められたことが報告された。学校によっては、学校間のパートナーシップづくりの条件整備も進んだ。

その一方で、受入校の状況に差異があったり双方の体制がマッチしなかったりして、学校間のパートナーシップづくりが、困難なケースもあった。また、事前の連絡不足や情報不足が原因となり、予定を変更されるケースもあった。募集の方法や事前学習会の内容などにも関連する部分であり、今後の課題となる。

#### (5) 終わりに

第1年次の受入と派遣、第2年次の受入と派遣、帰国後の交流(第3年次の受入を含む)を通して、2001年8月末までに、広島大学地区またはECU地区において次の各校が姉妹校提携の協定書に調印・署名または仮調印・代理署名の運びとなった。

東広島市立御薮小学校 (広島大学地区)

Virginia Williamson E. S. (NCUW)

三郷町立三郷北小学校 (大阪教育大学地区)

Wahl Coates E. S. (ECU)

広島大学附属三原小学校 (広島大学地区)

Wahl Coates E. S. (ECU)

広島大学附属東雲中学校 (広島大学地区)

Exploris M. S. (ECU)

広島大学附属三原中学校 (広島大学地区)

Martin M. S. (ECU)

このように、本プロジェクトの主要な目的である学校間のパートナーシップづくりは成果をあげている。しかし、強固で継続的なパートナーシップづくりは、むしろこれからということになるであろう。実質的な交流が行われ、関係校の児童・生徒の国際理解が深まるように支援していくことができれば幸いである。

日米両国の参加者が直接的な異文化体験をしたこと、両国において国際理解教育の活動やプログラムが開発されたことなど、相互訪問によって個人的なレベルから学校レベルにいたるまで大きな成果が得られている。ご協力をいただいた関係機関や関係諸氏に心から感謝いたします。

## グローバル・パートナーシップの展開 —Whal Coats小学校の訪問を通して—

広島大学附属三原小学校 教諭 見藤孝二

### 1. はじめに

私が訪問したWhal Coats小学校は、Greenville市内にあり、ECUにも近く、緑に囲まれたすばらしい環境の小学校である。1年生から5年生まで各学年とも4クラスあり、1クラス約25人で全校児童約500人の小学校である。

3日間という短い期間、しかも英語ができないという状況の中での研修だったので、学校運営や授業について詳しくみることができず、大まかな観察にならざるを得なかったが、自分の仕事を振り返ることができた貴重な体験であった。

### 2. 授業について

4日間、学校訪問する中で観察できた授業は、算数、図工、音楽、社会、リーディング、ガイダンスだった。

算数の授業は2年生の授業を見た。文章問題を考える授業だった。2問あり、1問目は解く時間を10分間ほどをとり、できた子から発表していった。4通りの考え方がでて、教師は、その考え方が子どもたちにわかりやすいように絵を描いたり図を描いたりして説明していた。手が上がらなくなったので、次の問題を考えていったが、この授業では、いろいろな考え方があるということを示したかったのだと思う。なぜ、この授業をしたのか、担任と話すことができなかったのが残念だが、算数の授業に関して分かったことは、年間の指導項目を常に意識してチェックし、子どもたちに出したプリントは必ず回収して、一人ひとり評価しているようだ。カリキュラムに則し、指導内容をチェックしたり、一人ひとりをきちんと評価したりしている点は、日本よりきめ細かく行っていると思った。

リーディングの授業は日本でいえば読み取りの時間である。日本で、読み取りを45分間もすることは考えられないので、どんなことをするのかとても興味があった。5年生のリーディングの授業を見た。授業の始めに、今まで読んできたことの復習があり、担任の質問に子どもたちが手を挙げて答えていた。次に、この時間にすることの話があった。それが終わると、子ども

たちは、3～4人グループに分かれて、読み始めた。この読み取りは、日本と同じだったが、机で読むグループもあれば、床に座って読むグループもあり、自由な雰囲気読んでいた。また、読みながら内容のポイントをノートに書いている子もいた。時には、先生からプリントが配られ、読みとった内容や自分の感想を書く時間もあるということだ。日本でも、本をみんなで読むということはあるが、それは、どちらかという理解したことを表現するために行っているが、アメリカの場合は、読む活動を通して内容を理解することに目的があり、こういった読み取りの活動も大切だと思った。

授業について感じたことは、どの教科も明確な評価に基づいたカリキュラムが作られており、教師はそれに基づいて授業を進めているのがよく分かった。日本の場合、各教科とも指導内容は示されているが、何ができて、何ができないかという細かいところまでの評価が求められていないので、一人ひとりをきちんと評価するという点では弱いように思う。

### 3. スタッフについて

アメリカの教育は様々な内容に対する対応がきちんとしていると聞いていたので、どのようなことが行われているのか関心があった。

ハンディキャップをもっている子どもたちの授業を見た。この学級には、10人くらいの子もたちがいたが、先生は3人がついてた。後で分かったことだが、その中の一人は教育実習生で、1年間教育実習にくるので、ほぼ学校職員と同じ扱いである。実際、授業では、障害の重い子一人にずっとついて、絵本を読んだり、パズルをしたりしていた。

2人の先生は、障害の程度に応じて子どもたちを2つのグループに分けて授業を行っていた。

次に、メディアセンターでの授業を見させてもらった。メディアセンターは日本で言えば図書室のようところだが、そこには専任の先生がおり、本だけでなく、コンピュータ、OHP、マイクロフィルムなど様々

な視聴覚教材を管理、指導できる体制が整えられていた。メディアセンターには、コンピュータが20台ちかくあったが、15台と5台の2つのグループに分けられ、数の多い方は学年の子どもたちが使っていた。数の少ない方も子どもたちが使っていたが、その子どもたちは、特別に選ばれた優秀な子どもたちが使っていた。学級の子どもたちがコンピュータを使う場合も担任と専任の先生の2人で指導にあたっていた。

4年生の算数を見に行ったとき、学級の人数が少ないので驚いた。聞いてみると、他の先生のところへも行って教えてもらっているとのことだった。教えられた教室に行ってみると、10人くらいが少し簡単な問題をやっていた。それでも人数が少ないので、他の子はどうしているのかと尋ねると、廊下でも教えてもらっている子がいることが分かった。廊下へ出てみると、テーブルがあり、そこでマンツーマンで算数を教えてもらっていた。廊下で教えてもらっている子は他にもいたので、誰が教えているのか尋ねてみると、ボランティアの人が来て教えているということが分かった。このように、Whal Coats小学校ではボランティアの先生がいろいろな場面で授業に協力している。私が見た授業には警察官が来てドラッグについて教える授業やアメリカに滞在している外国の子に対する英語の授業などがあった。この小学校には約50人のボランティアが登録してあるそうだ。

#### 4. 生活指導について

私が強く感じたのは、生活指導というよりしつけが厳しいという点である。どの教室に行ってもクラスルールを書いた掲示がしてあった。次にあげるのは5年生の教室に掲示してあったものである。

- ① 教室には時間通りきちんといなさい。



- ② 先生が指示したことにはきちんとしたがいなさい。
- ③ 手を挙げて発表しなさい。
- ④ 決められた席に座りなさい。
- ⑤ 席にはきちんと座りなさい。

このようなルールが低学年から徹底されているからだと思うが、どの学年の授業でも必ず手を挙げて発表していたし、机の上にジュースを置いてあったが授業中は決して手をつけることはなかった。また、次のような場面にも出会った。メディアセンターで専任の先生にコンピュータについて話を聞いていたときである。3人の子が本を借りに来たが、先生は私と話をしていたので、子どもたちは先生の話が終わるまでずっと黙って待っていた。日本なら、教師も少しの時間なので話を中断して貸し出しをするだろうし、子どもも貸し出しをしてほしいと要求するだろう。結局、子どもたちは本の貸し出しをすることができたが、もし、話が長くなり貸し出しの時間が終わってしまったら、あきらめて帰るそうである。大人が社会の中心だということを感じた出来事だった。教室の移動も厳しく、必ず廊下に並んで静かに移動していた。その際、担任も列の先頭につき、教室に入ったり、スクールバスに乗ったりするまで見届けていた。これらのルールの厳しさは、子どものしつけをしっかりとつけるという面もあるが、学校の安全管理を徹底するために厳しくしている面もあると思われる。

#### 5. 姉妹校提携について

本校とWhal Coats小学校は今回の訪問で姉妹校提携を結ぶことになった。書類の不備で私のアメリカ訪問ではサインアップすることができなかったが、7月のWhal Coats小学校の先生たちの日本訪問でサインアッ



ブすることができた。昨年度から始まった交流では、  
図画工作の作品の交換がある。この提携を機会に、e  
メールの交換や学習の交流などを増やしていき、国際  
交流を深めていきたいと思う。

## 6. おわりに

学校の運営や授業についてアメリカと日本の違いを

私を感じたままに述べたが、どの面を見ても、アメリ  
カにも日本にもよい面と悪い面があるように思えた。  
ただ、この思いは、このプロジェクトに参加すること  
ができたから感じることもできたのである。個に対す  
る授業の丁寧な評価や様々な教育に対応するスタッフ  
の充実など、これからの私の仕事の中にもしっかりい  
かしていきたいと思う。

# 日本とアメリカの情報教育（コンピュータ活用）の比較研究 —アンケートをもとにした現状や意識の違い—

広島大学附属三原小学校 教諭 見藤孝二

## (1) はじめに

今やコンピュータは私たちの生活の中にとけ込んでいる。民間の会社では、コンピュータなしでは毎日の仕事が成り立たなくなっているし、毎日の生活においてもパソコンを使ってeメールを楽しんだり、商品の注文をしたりとパソコンやインターネットを上手に活用しながら生活している。もはや、コンピュータなしでは充実した仕事や生活を送れない時代になりつつあると言ってもよい。このような状況の中で学校の中にもコンピュータが導入され、現在ではほぼ日本中の学校にコンピュータが配備され、インターネットができる環境も整いつつある。

ところが、学校の中でのコンピュータの活用状況を見ると、学校間差、学級間差がかなりあり、子どもたちがホームページを作って情報発信している学校もあれば、コンピュータ室に鍵がかかり、全く使われていない学校もある。この差は、日本においては情報教育がコンピュータに関心を持っている教師にまかされているからではないかと私は思っている。今回、コンピュータの先進国であるアメリカを訪問する機会を与えられた。アメリカ（ノースカロライナ州）でのコンピュータに関する教育はどのように行われているのか、

その現状を観察するとともに、日本の学校でのコンピュータに関する教育の方向を探っていけたらと考える。

## (2) 研究の概要

### ① 研究の目的

日本とアメリカのコンピュータの活用状況を調査し、今後の日本の情報教育のあり方を探る。

### ② 研究の方法

- ア、日本とアメリカの児童や教師にコンピュータの活用状況のアンケート実施し、現状を分析する。
- イ、アメリカの学校のコンピュータ活用の現状を観察する。

### ③ 研究の具体的内容および方法

日米の子どもたちや教師たちが、コンピュータの活用についてどのような現状なのか、また、どのようなことを思っているのかを知るためにアンケートを実施した。なお、このアンケートの内容は子ども用と教師用は違っているが、日本とアメリカでは同じ内容のものを使っている。

### ④ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関
3/27 (火) 10:30~ 11:10 13:20~ 14:00	Whal-Coates School	メディア担当のCrew先生との打ち合わせをする。この時、コンピュータ活用のアンケート用紙をHarvey副校長に渡す。 Shreve先生のコンピュータを使った授業を参観する。	Crew先生 Sandra W. Harvey  Barbare Shreve Crew先生
3/28 (水) 8:15~ 8:55	Whal-Coates School	メディア担当のCrew先生のコンピュータを使った授業を参観する。	Crew先生
3/29 (木) 9:45~ 10:25	Whal-Coates School	メディア担当のCrew先生に学校の情報教育に関する内容の話を聞いたり、コンピュータの施設を見せてもらったりする。	Crew先生



13:15~ 14:00		Whichard 先生のコンピュータを使った授業を参観する。	Whichard先生 Crew先生
3/30 (金)	Whal-Coates School	回答してもらったアンケート用紙をHarvey副校長から受け取る。	Harvey副校長

(3) 研究の結果と考察

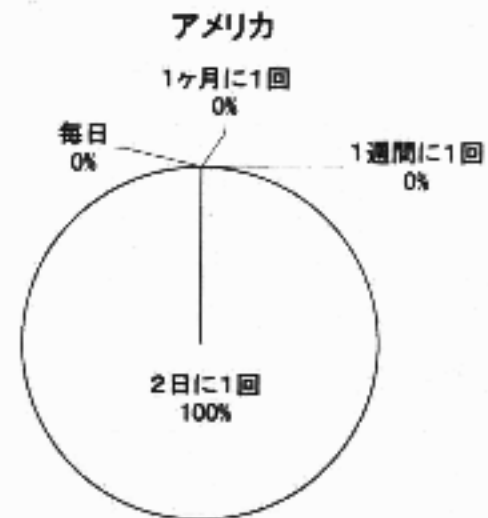
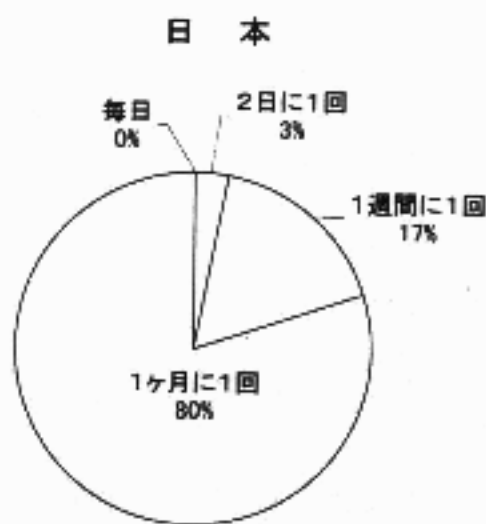
① アンケートをもとにしたコンピュータ活用の日米の比較

附属三原小学校の6年生

Whal-Coatesの小学校の5年生

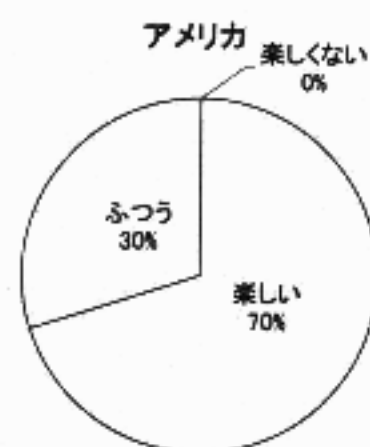
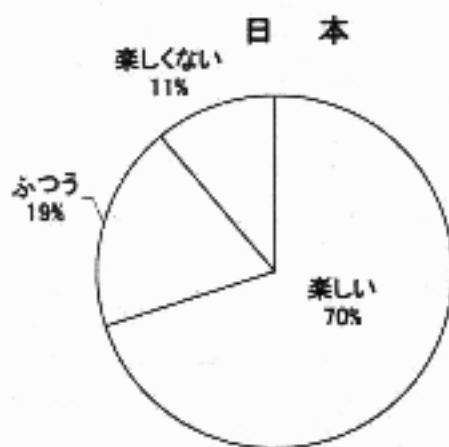
資料 1

学校で使っている間隔



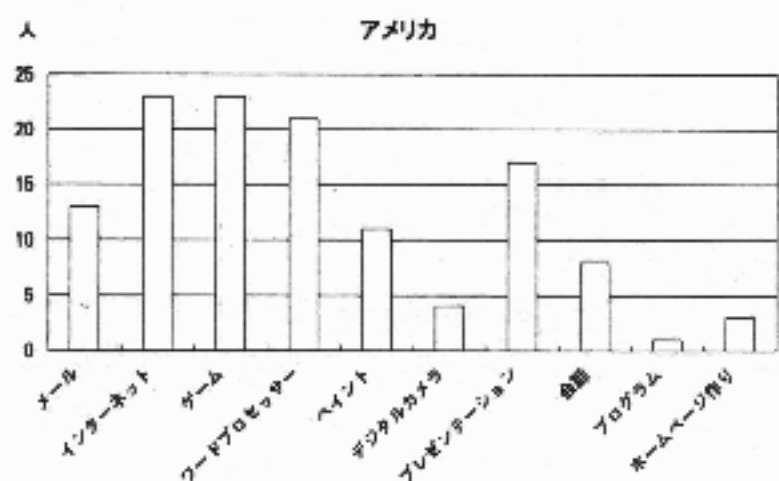
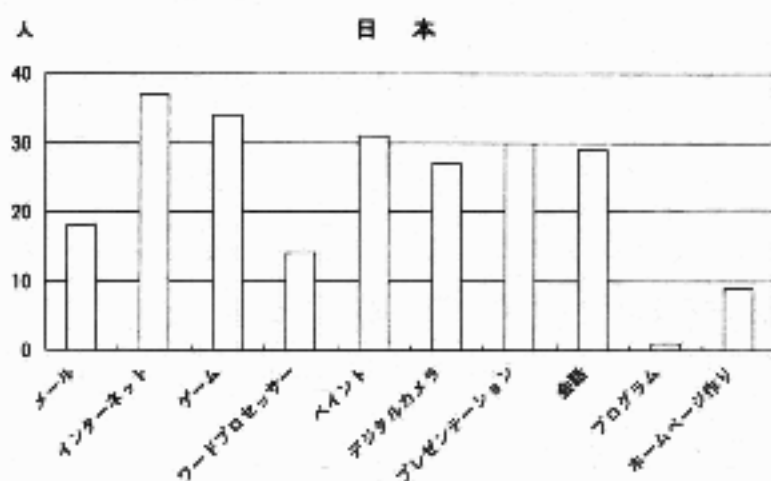
資料 2

コンピュータを使った学習



資料 3

学校でのコンピュータ利用



資料 4

学校でのコンピュータ使用時のきまり

- 日 本
- ・印刷するときは、何度もおさない。
  - ・電源をちゃんと切る。
  - ・許可なく使わない。
  - ・コンピュータ室で遊ばない。
  - ・乱暴に扱わない。
  - ・いすをちゃんと納める。

- ア メ リ カ
- ・疑わしいところにアクセスしない。
  - ・チャットルームは使わない。
  - ・インターネットで買い物をしない。
  - ・コピーをしない。

資料 5

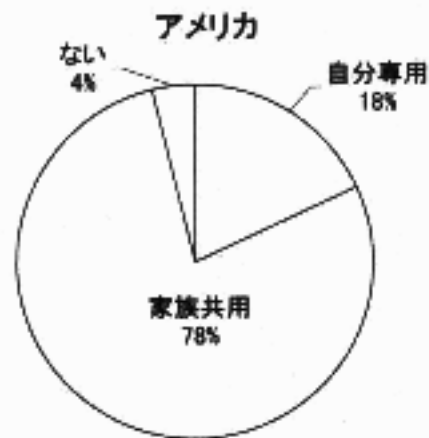
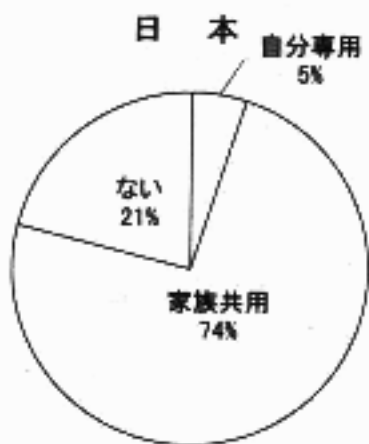
インターネットやメールでやってはいけないこと

- 日 本
- ・18歳未満禁止のところへアクセスしない。
  - ・怪しいメールを送らない。
  - ・いたずらメールを送らない。
  - ・ウイルスを送らない。
  - ・ハッカーをしない。
  - ・変なホームページを作らない。

- ア メ リ カ
- ・人を脅さない。
  - ・変なホームページを見ない。
  - ・汚い言葉を使わない。
  - ・よくない絵を見せない。
  - ・他人を攻撃しない。

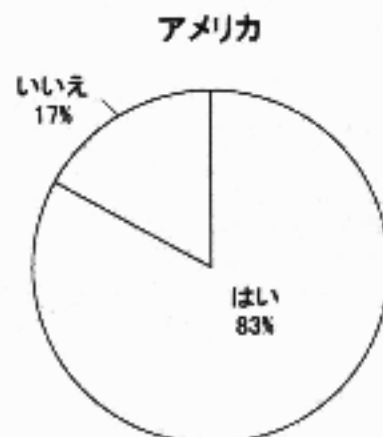
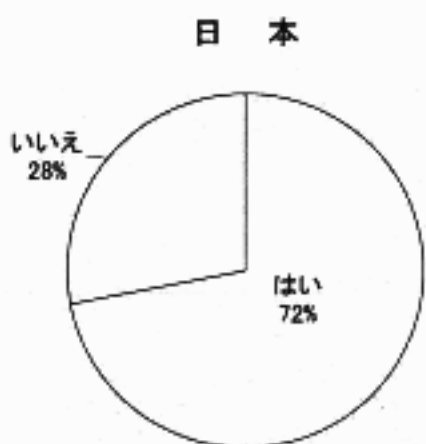
資料 6

家でのコンピュータ利用



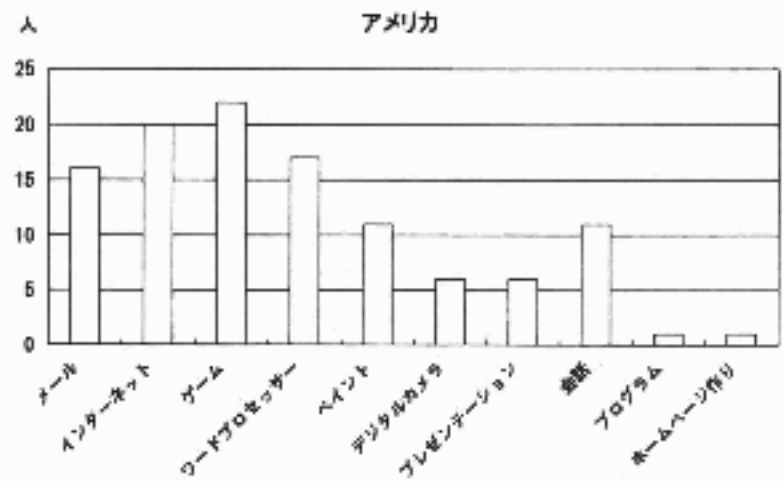
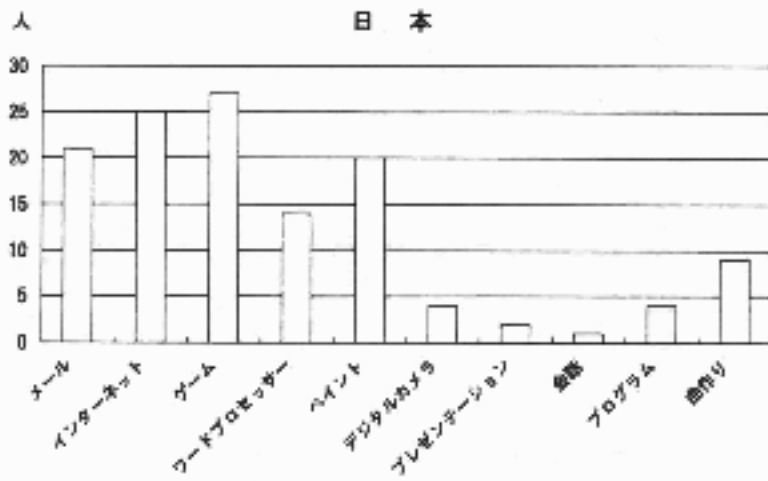
資料 7

家でインターネット・メールができる



資料 8

家でのコンピュータ利用

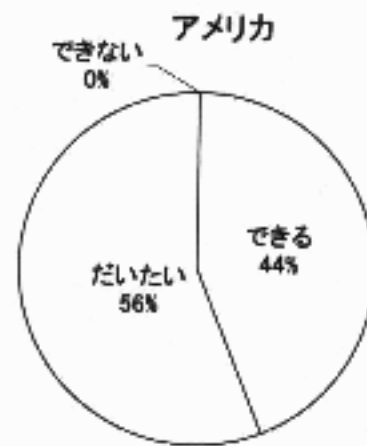
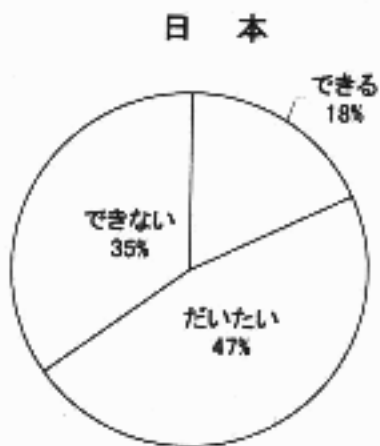


附属三原小学校の先生

Whal-Coatesの小学校の先生

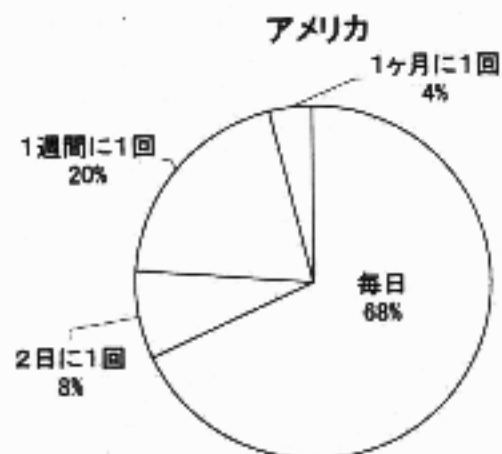
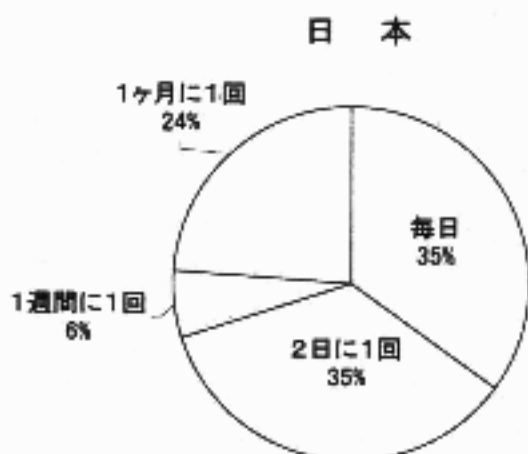
資料 9

コンピュータを使うことができる



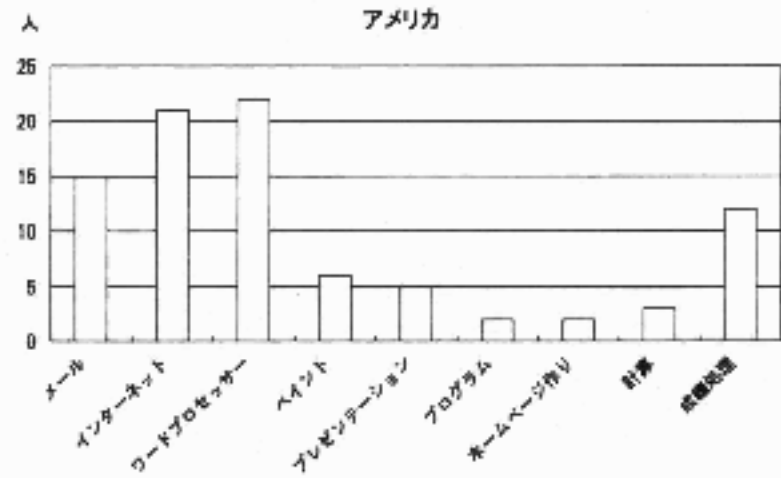
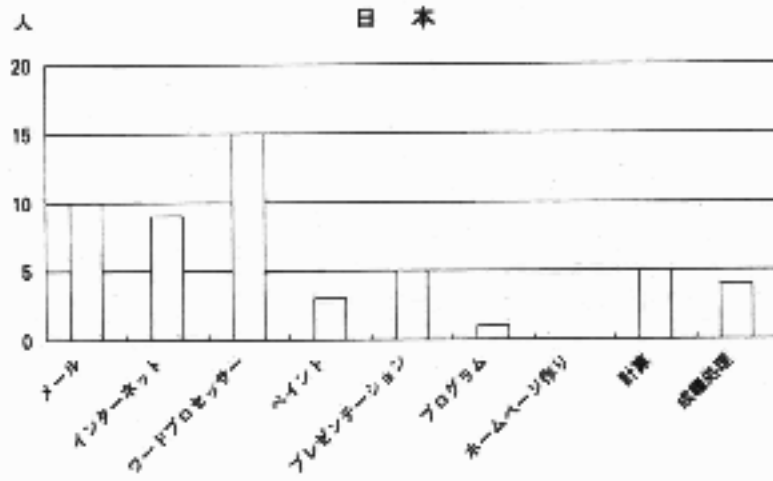
資料 10

学校で使っている間隔



資料 11

学校でのコンピュータ利用



資料 12

学習での活用内容

日本

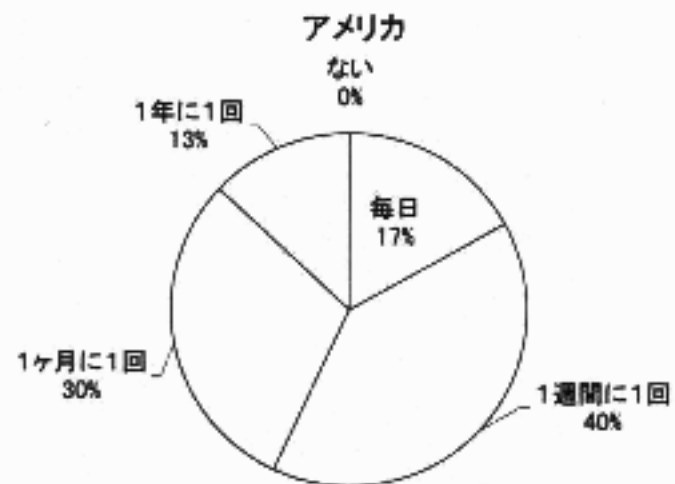
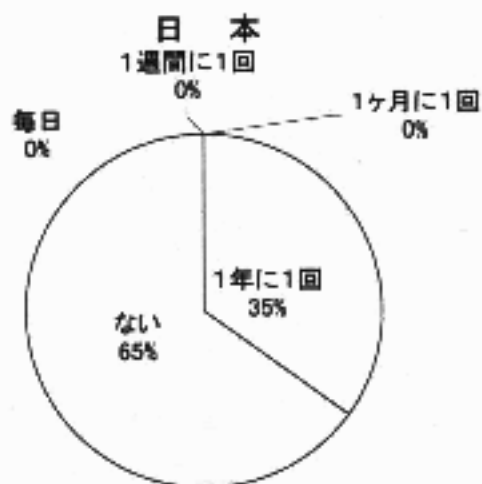
総合	インターネットを使った調べ学習
理科	調べ学習
図工	ペイントを使った作品作り
社会	インターネットを使った情報収集

アメリカ

理科	調べ学習
算数	四則計算のスキル、グラフ
美術	ペイントを使った作品作り
社会	調べ学習
体育	体力テスト、記録をとる
音楽	音楽技術の習得
リーディング	読解スキル、理解度チェック
ライティング	物語をタイプする

資料 13

コンピュータの研修



資料 14

受けた研修内容

- 日 本
- ・ワード文書の作成
  - ・表計算
  - ・LANについて

- ア メ リ カ
- ・ウェブページ作成
  - ・ワード文書作成
  - ・エクセル
  - ・デジタルカメラ、ビデオ編集
  - ・パワーポイント
  - ・ビデオ会議
  - ・データベース
  - ・ソフトのダウンロード
  - ・レッスンプランの作成
  - ・インターネットについて
  - ・コンピュータ使用についての倫理

資料 15

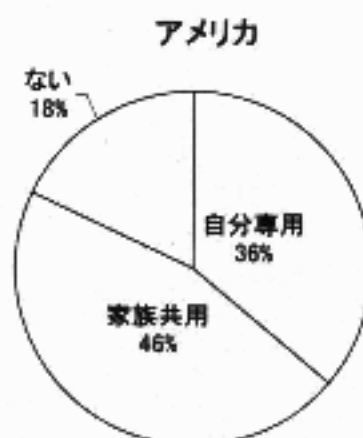
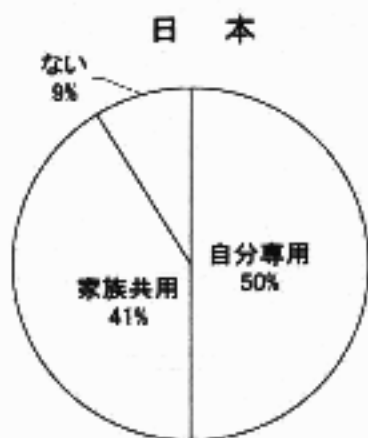
コンピュータを活用するために必要なこと

- 日 本
- ・コンピュータ利用の倫理教育
  - ・コンピュータリテラシーの確立
  - ・コンピュータ機器の充実
  - ・コンピュータ操作の研修

- ア メ リ カ
- ・コンピュータを使った復習を学習にどのよ  
うにいかすか
  - ・コンピュータを使う時間を多くする
  - ・コンピュータ機器の充実
  - ・ソフトウェアの充実
  - ・最新のコンピュータ技術を体験する研修

資料 16

家でのコンピュータ利用



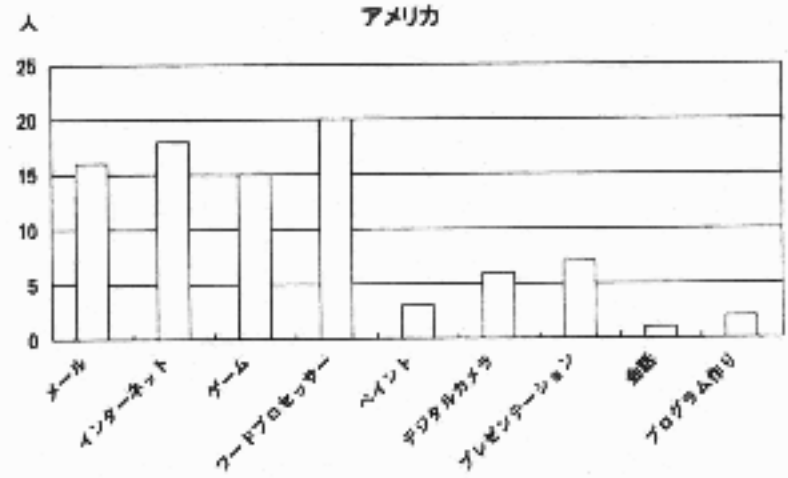
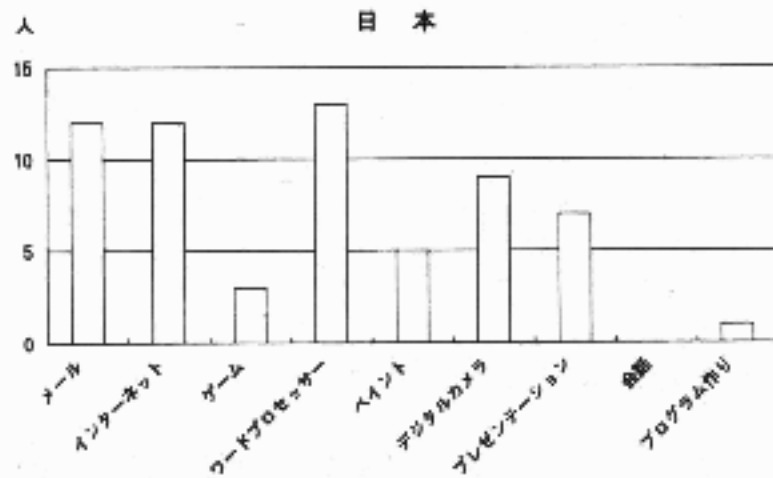
資料 17

家でインターネット・メールができる



資料 18

家でのコンピュータ利用



② アンケートの考察

資料 1 (学校で使っている間隔について)

本校は1ヶ月に1回くらい使っている子が80%だったが、アメリカは2日に1回くらい使っている子が100%だった。コンピュータのふれる機会は、日本に比べてアメリカの方がはるかに多いことが分かる。

資料 3 (学校でのコンピュータ利用)

学校でコンピュータをどのように利用しているかについては、日本もアメリカも、メール、インターネット、ゲーム、ワープロなどだいたい同じようなものが多かった。

資料 4 (学校でのコンピュータ使用時のきまり)

本校は、印刷するときは、印刷ボタンを何回も押さない・電源をちゃんと切る等、施設や機器の技能的な使い方に対するきまりをあげている子が多かった。アメリカは、疑わしいところにはアクセスしない等、倫理的な態度に対するきまりをあげる子がほとんどだった。日本の場合、施設や機器の使い方に対するきまりが厳しすぎる傾向があり、コンピュータをしっかり使

おうとする気持ちを阻害しているように思える。

資料 5 (インターネットやメールでやってはいけないこと)

本校の子もアメリカの子もこの項目については、だいたい同じ回答をしていた。本校の子どもたちは、コンピュータ利用についてのエチケットはほとんど学習していないにもかかわらず、アメリカの子どもたちとかわらないということは、学校以外にテレビや雑誌などから情報を得ているものと思われる。

資料 6~8 (家でのコンピュータ利用)

資料 6~8 については、家でのコンピュータ利用の内容だった。家にコンピュータがあるか、インターネットができるか、どのように利用しているかについて調べたが、わずかにアメリカの方が積極的に利用しているが、あまり差がなかった。

資料 9 (コンピュータを使うことができる)

資料 9 は日本 (本校) とアメリカ (Whal-Coates 小学校) の先生たちを比較したものである。アメリカの先生は100%使うことができるのに対して、日本の先生

は、35%もの先生が使うことができないという状況である。学校の中にある程度コンピュータが導入され、先生も子どもたちも使える環境が整っているにもかかわらず、教える立場の先生が指導できない状況というのは情けない話である。

#### 資料10～11（学校で使っている間隔や利用方法）

学校で使っている間隔は毎日と2日に1回を合わせるとどちらの国も70%くらいである。利用方法は、どちらの国もメール、インターネット、ワープロが多かった。どちらの国も事務処理の一環としてコンピュータを活用していることが分かる。

#### 資料12（学校での活用内容）

本校の場合はインターネットを使った調べ学習、ペイントを使った作品作り、ワープロを使った文章作成など、コンピュータの特長をいかした使い方が多かった。アメリカの場合は、本校の活用方法以外に、四則計算の復習、リーディングの理解度チェックなど反復練習としての使い方や、メディア情報スキル・コンピュータスキルなどコンピュータを教えるための使い方もあることが分かった。

#### 資料13～15（コンピュータの研修時間・研修内容）

この項目では、日本とアメリカで大きな差ができた。本校の場合はコンピュータの研修が全く行われていないが、アメリカの場合は先生たちの半分は1週間に1回以上は研修を受けていることが分かった。本校の場合は確かに校内研修でコンピュータを使った研修をしたことはないが、休憩時間や放課後などにコンピュータに詳しい先生に教えてもらっている姿を見ることが多い。アメリカの場合はメディア担当の先生が配置され、情報機器の配備・保守から校内研修の計画・実施までを行っている。したがって、受けた研修内容にも大きな差ができ、アメリカの場合はインターネット、ワープロ、ビデオ編集、パワーポイント、コンピュータ使用についての倫理、ダウンロードなど多岐にわたって研修を受けられるようになっている。

#### 資料16～18（家でのコンピュータ利用）

この項目は、家にコンピュータがあるか、家でインターネット・メールができるか、家ではどのように使っているかだったが、日本もアメリカもだいたい同じ状況だった。学校の利用状況では日米に大きな差ができているので、家でも大きな差ができると考えていたが、日本もアメリカには負けていないことが分かった。

③ 現地での観察



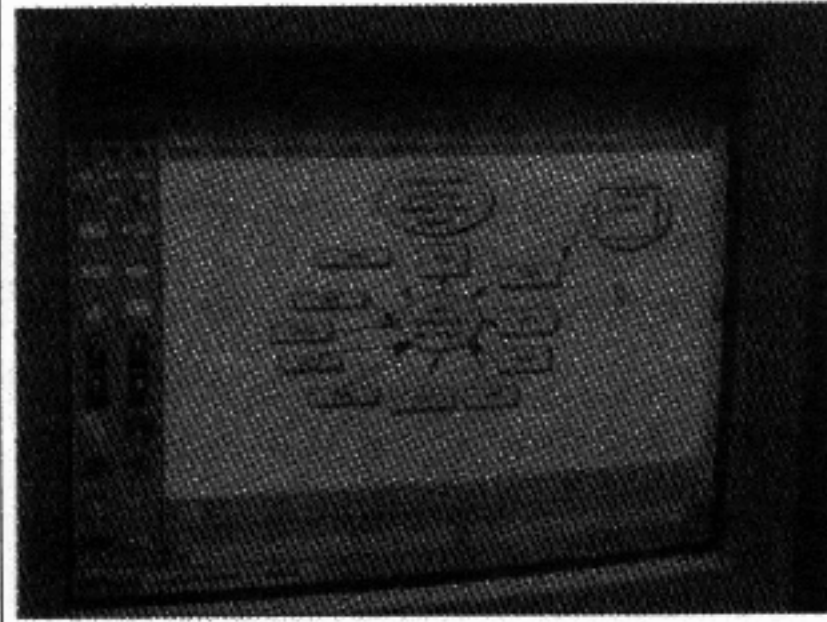
各教室には3～4台くらいコンピュータがあり、いつでも電源は入れてあり、すぐに使える状態にしていた。



3年生の算数の時間にコンピュータを使っていた。授業内容は、かけ算の復習をしていた。



メディアセンター担当のCrew先生のコンピュータを使った授業が行われていた。優秀な児童たちが高度な授業をしていた。



5年生の社会科の授業で、プレゼン用ソフトを使って、調べたことを関係づけていた。



メディアセンターのスタッフルームの様子。イントラネット用のサーバーが置かれていた。



携帯用のメモリー付きキーボード。コンピュータが使えない場合は、これに文字を入力しておく。



#### (4) 研究のまとめ

○ノースカロライナ州の Standard Course of Study (学習指導要領のようなもの) には Computer/Tech Skills というコンピュータに関するカリキュラムがある。その中には、小学校・中学校・高校でどのよ

うな技術を身につけなければならないか、どのようなことができなければならないか明確に書いてある。したがって、学校にはコンピュータ機器が配備され、先生はコンピュータの指導ができるようになってい

#### Standard Course of Studyの一部抜粋

<b>Computer Technology Skills (1998) -Grade 5 - Goal 2, Objective 3</b>	
<b>Area</b>	Computer Technology Skills
<b>Goal</b>	2. The learner will demonstrate knowledge and skills in the use of computer and other technologies.
<b>Objective</b>	3. Use keyboarding skills to improve speed and accuracy. (Keyboard Utilization/Word Processing/Desk Top)

一方、日本では、2002年度実施の小学校指導要領を見てみると、コンピュータに関する学習は総合的な学習の中の課題例として入っている。また、各教科の中でもコンピュータを積極的に活用するように述べられている。しかし、どの教科もどの学習で何時間くらい指導するのか具体的な内容が示されておらず、学校・教師にまかされているのが現状である。また、コンピュータ操作能力(コンピュータリテラシー)についても、どの学年でどんな力をつけなければならないかも示されておらず、学校・教師まかせになっている。したがって、活用状況にばらつきがあるとともに、積極的な学校と消極的な学校の差が拡大する傾向にある。

○子どもたちの現状をみると、学校でのコンピュータの利用は、アメリカの方が活発であるが、どのような形で利用しているかは、同じであった。アメリカの場合は、自由な雰囲気の中で積極的に使い、どのような使い方が大切なのかをしっかりと教えている。日本の場合は、ハード面は同じでも、使う時間が少なく、使い方のきまりを厳しく教えている。今後は、コンピュータを有効に活用できる体制を整える必要がある。家での利用状況は、日本もアメリカもほぼ同じなので、学校レベルでの格差を縮めるよう努力しなければならないと思う。

○先生たちの現状をみると、アメリカの場合はコンピュータ専任の先生が技能的・応用的な研修を進めているので、授業でも事務処理でもコンピュータを積極的に活用している。日本の場合は担当者がいてもコンピュータ以外に重要な仕事を持っているので、技能的・応用的な研修を進めにくく、先生たちの利用も消極的である。ハード面での差は少ないので、先生たちの技能・応用力を高める研修を進めていけば、子どもたちも先生たちも積極的に活用できるようになると考える。

#### (5) おわりに

今回、Whal-Coates 小学校を訪問し、授業を見たり、学校の施設を見たりすることで、自分たちが行っていることとの違いを比較することができたのがすばらしかった。この違いを意識しながら、これからの仕事の中にいかしていききたいと思う。コンピュータの指導に関しては、国(州)の方針に違いがあるので、今後はこの違いから生じるものがどうなっていくのか自分なりにしっかり見ていきたいと思う。

今回の訪問を機会にWhal-Coates 小学校と姉妹校提携を結ぶことができた。まだ、具体的な交流は始まっていないが、作品交換やメール交換などを通してできるところから少しずつ始めていきたいと思う。

資料

コンピュータについてのアンケート 子ども用

1. あなたは何歳ですか。
  1. 6歳
  2. 7歳
  3. 8歳
  4. 9歳
  5. 10歳
  6. 11歳
  7. 12歳
  8. 13歳
  9. 14歳
2. 性別は
  1. 男
  2. 女
3. あなたは学校でコンピュータを使ったことがありますか。
  1. ある
  2. ない
4. 学校ではどれくらいの間隔でコンピュータを使っていますか。
  1. 毎日使っている
  2. 2日に1回くらい
  3. 1週間に1回くらい
  4. 1ヶ月に1回くらい
5. 学校でコンピュータを使った学習は楽しいですか。
  1. たのしい
  2. ふつう
  3. たのしくないどうしてそう思うのか、理由を書いて下さい。  
[ ]
6. 学校ではコンピュータをどのように利用していますか。(複数回答可)
  1. メール
  2. インターネット
  3. ゲーム
  4. ワードプロセッサ
  5. ペイントソフト
  6. デジタルカメラなどの画像
  7. プレゼンテーション
  8. コンピュータで話をする
  9. プログラムを作る
  10. ホームページづくり
7. 学校ではどんな学習のときにコンピュータを使っていますか。(複数回答可)
  1. 国語
  2. 算数
  3. 理科
  4. 社会
  5. 図画工作
  6. 音楽
  7. 体育
  8. 休憩時間
8. コンピュータを使ってどんな学習をしたことがあるのか、簡単に書いて下さい。  
[ ]
9. 学校でコンピュータを使ってどんなことがしてみたいですか。  
[ ]
10. 学校でコンピュータを使うときの決まりを書いて下さい。  
[ ]
11. インターネットやメールを使うとき、やってはいけないことはどんなことがあると思いますか。思いつくことを書いて下さい。  
[ ]
12. あなたの家にコンピュータはありますか。(複数回答可)
  1. 自分専用
  2. 家族共用
  3. ない
13. 家のコンピュータはインターネットにつながりますか。
  1. はい
  2. いいえ
14. 家ではコンピュータをどのように利用していますか。(複数回答可)
  1. メール
  2. インターネット
  3. ゲーム
  4. ワードプロセッサ
  5. ペイントソフト
  6. デジタルカメラなどの画像
  7. プレゼンテーション
  8. コンピュータで話をする
  9. プログラムを作る

コンピュータについてのアンケート 先生用

1. あなたは何歳ですか。 (            )
2. 性別    1. 男    2. 女
3. コンピュータを使うことができますか。  
    1. できる    2. だいたいできる    3. できない
4. 校ではどれくらいの間隔でコンピュータを使っていますか。  
    1. 毎日    2. 2日に1回    3. 1週間に1回    4. 1ヶ月に1回
5. 学校ではコンピュータをどのように利用していますか。(複数回答可)  
    1. メール    2. インターネット    3. ワードプロセッサ    4. ペイントソフト  
    5. プレゼンテーション    6. プログラム作り    7. ホームページ作り    8. 表計算  
    9. 成績処理    10. 利用しない    11. その他 (            )
6. 学校では、どんな学習の時、どのように、コンピュータを使っていますか。  
    教    科                                  どのように使っているか  
    [                                  ]    [                                  ]
7. 学校でコンピュータを使うときの決まりは、どのようなものがありますか。  
    [                                  ]
8. 学校でコンピュータについての研修する時間がありますか。  
    1. 毎日ある    2. 1週間に1回はある    3. 1ヶ月に1回はある    4. 1年に1回はある  
    5. まったくない
9. 今までに受けたコンピュータについての研修では、どのようなものがありますか。  
    [                                  ]
10. 学校や授業でコンピュータを利用するためには、これからどんなことが必要だと思いますか。  
    [                                  ]
11. あなたの家にコンピュータはありますか。(複数回答可)  
    1. 自分専用    2. 家族共用    3. ない
12. 家のコンピュータはインターネットにつながりますか。  
    1. はい    2. いいえ
13. 家ではコンピュータをどのように利用していますか。(複数回答可)  
    1. メール    2. インターネット    3. ゲーム    4. ワードプロセッサ    5. ペイントソフト  
    6. デジタルカメラなどの画像    7. プレゼンテーション    8. コンピュータで話をする  
    9. プログラムを作る

# BRIDGING CULTURES

—広島大学附属三原中学校とマーチン中学校に、文化の掛け橋を築くために—

広島大学附属三原中学校 教諭 今川卓爾

## (1) これまでの経過

平成13年3月の27日～29日の日程で、報告者はノースカロライナ州のターボロにあるマーチン中学校（以下、MMS）を訪れた。この間に、報告者はマーチン中学校の学校管理職（ウェイン・ミラー校長）及びグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト（以下、GPS）に関わる指導的教師（マーシャル・マットソン教諭、シャウナ・アンドリュース教諭）とGPSのお互いの目的やゴールについて討議した。ここでは、ノースカロライナ州（以下、NC）ターボロにおける公立学校の状況、MMS 校内における人的資源の配置、生徒の状態、お互いの学校の教育目標や特徴及び制約、などについて紹介があった後、相互理解を進める狙いやもたらされる利益、について討議した。その結果、相互理解の最初の段階として生徒間の交流を進め、そこから共通する疑問や課題を発見し、共通の課題を追究するプログラムを開発し、その後、教師間の交流を進めることが話し合われた。このとき、日本からは前年度の派遣者である木本一成教諭が作成した2年生生徒82名のプロフィールを持参し、同様のプロフィールをMMS側で作成してもらい、M・マットソン教諭と報告者が31日の休日を利用してマッチングを完了させ、報告者が帰国後生徒に渡して、文通が開始された。

### ① 相互理解交流の展開

平成13年6月の25日～29日の日程で、マーチン中学校からW・ミラー校長、ジャン・ナイトン教諭、S・アンドリュース教諭、およびM・マットソン教諭らが、広島大学附属三原中学校（以下、三原中）へ訪れた。この期間中に、ミラー校長は、三原中の学校管理職（金丸純二副校長）や、木本一成教諭、報告者とともに、GPSにおける相互のゴールを開発するために協議を続けた。

W・ミラー校長、J・ナイトン教諭、S・アンドリュース教諭、およびM・マットソン教諭は、多くの時間をかけて各クラスで観察し、その他の仕事をした。

4人全員は、大和浩子教諭の美術の授業に参加し、

生徒と共に小グループに分かれて活動した。プロのゴスペル歌手でもあるW・ミラー校長と音楽担当のJ・ナイトン教諭は、1年A組の音楽の授業でゴスペルを生徒に教え、共に歌った。この授業を終えようとしたとき、生徒の中から、自分たちも彼らのために歌いたいという思いが自然と湧き起こった。音楽の世話役の生徒が、伴奏を音楽担当の桑田一也教諭に頼み、帰りのSHRで自主的に練習してきた曲「時の旅人」を堂々と、しかも心から歌った。この歌が終わって生徒が教室を後にしたとき、W・ミラー校長と、J・ナイトン教諭の目から涙がこぼれていた。

次の週と翌週の前半まで（7月2日～11日）、M・マットソン教諭とS・アンドリュース教諭は、金丸純二副校長、木本一成教諭及び松尾砂織教諭及び報告者と共に、三原中とMMSとの間に協力体制を実現するための詳細な道筋を検討し合った。これらの会議で、検討チームはゴールを討議した。そして、コミュニケーションの実現に向けたいくつかの障害や、二校間の現実の

2001年(平成13年)7月4日(水曜日) 中日新聞

### 米の教諭と交流授業

#### 学校の様子紹介し合う

【大原 村中 三原】

日本の相互理解を進める国際交流授業が3日、三原市三原町の広島大学附属三原中学校(以下、三原中)と、米国の教諭2人が三原を訪れ、現地の授業の様子などを紹介した。

訪れたのは、ノースカロライナ州マーチン・ミラー校長、ジャン・ナイトン教諭、S・アンドリュース教諭、およびM・マットソン教諭らで、三原中を訪れたのは、前年からの交流で、お互いの学校の様子を紹介し、生徒が互いの学校を訪れ、各クラスで授業を観望し、美術の授業に参加し、大和浩子教諭の指導を受けた。

三原中では、生徒が互いの学校を訪れ、各クラスで授業を観望し、美術の授業に参加し、大和浩子教諭の指導を受けた。

三原中では、生徒が互いの学校を訪れ、各クラスで授業を観望し、美術の授業に参加し、大和浩子教諭の指導を受けた。

パートナーシップ実現への障害を見分けて、パートナーシップ実現のための最初のテーマを明らかにし、そして今後可能性のあるパートナーシップ・プロジェクトのモデルを開発した。

同時に、M・マットソン教諭、S・アンドリュース教諭及び報告者は、2年生の総合的な学習の時間で、3月にアメリカで検討した交流教育の第2段階の授業をティーム・ティーチング（以下、TT）の指導形態で実施した。これは、3月以降すでに生徒たちが始めている文通交流から一步進めて、お互いの学校における疑問点や共通する課題を見つけるための授業であった。アメリカの教師たちは帰米後に、今回と同じ授業を実施し、共通する課題を見つけることにしている。その後その共通課題の分析と解決をターゲットにしてお互いと共に学び合う学習体験を計画している。この授業は今後の相互理解学習へのステップとなる。なおこの授業は、中国新聞や三原テレビなど各メディアにも報道され、各方面へ紹介された。

#### ② 姉妹校協定の締結とその経緯

6月29日に、正式な姉妹校協定が日本語と英語で書かれた。協定の内容に関する多くの議論がなされた後で、ミラー校長はMMSの学校改善チーム（以下、SIT: School Improvement Team）との事前の相談なしで、三原中との姉妹校契約に関する正式な合意を契約することはできなかった。再びこれは多くの議論を引き起こした。ミラー校長は通訳者を通じて、SITとは何かを説明した。そしてミラー校長がSITに報告することが重要と感じた理由について述べた。

MMSのSITへの説明とチームの同意なしに協定書にサインすることを見合わせるということすべての関係者が理解したときに、'pending approval by the Martin Middle School Improvement Team' という文言が提案され、協定書に付け加えられた。これは、両校の管理職が共同で行った異例の出来事ではあるが、関係者は正式な調印として承認される見通しをもっている。事前に岩崎文人学校長から承諾を得ていた金丸副校長（岩崎文人校長代筆）とミラー校長は、その後修正された協定書にサインした。その後7月25日に、ミラー校長からSITで承認が得られた旨の連絡があり、正式にサインされた協定書が三原中に送られてきた。これをもって、本協定書は正式に発効した。

#### (2) プロジェクト・ゴール:

お互いについて学び、お互いとともに学び、お互いから学び合う。

三原中とMMSの生徒と教職員が、国際理解を向上させ得る学習協力関係を構築し、手を取り合うことで、お互いの教授法や学習法を進歩させ、世界平和の促進に貢献するだろう。

#### (3) 主題:

三原中とMMSの間に、文化の掛け橋を築く。

#### (4) 交流の各段階:

正式なパートナーシップ協定のもとでの教育的な交流は、以下の数段階で展開される。

##### ① 最も簡単な段階は、「お互いに知り合う」交流である。

この段階では、生徒の間だけでなく教師の間でも交流がなされるべきである。文化的あるいは社会的な情報知識の交流は、この段階での最初のゴールであり、そこには生徒や教師が相互に文通し合う関係を含んでいる。お互いの学校で文化や社会情報を共有するために、我々が相互に学び合う方法として可能なことを、この他にも実例を示す。

例えば、次のようなことである。

2001年3月に、報告者は、三原中学の学校生活について、MMSで授業をした。6月に入って、より一層課題を絞り込んだ授業が、三原中で日米の教師のTTによって開発された。この種の交流は単純ではあるが、その価値は実際より低く評価されるべきではない。

この種の交流は、ゴールを実現する上で取り組みやすいきっかけとなるし、今後より一層プロジェクトを洗練するために必要となる人間関係を築く上で重要な前提となる。

##### ② もう一つの交流の段階は、お互いの学校の生徒や教師が、2校間で共通の学習体験をすることである。

この「平行して行われる学習」つまり、一緒に学ぶことを体験すれば、生徒や教師は、興味深く、わくわくするような学習体験や教授法を経験するだろう。この平行学習プロジェクトは、お互いの学校の生徒が共通する同じ学習課題に関わっているという意味である。アメリカの生徒たちが我々と同じ授業に参加して、お

互いの学校の結果を比べることができるのだから、生徒たちは上記の成果以外にも、興味あることを発見するかもしれない。

例えば、双方の学校の教師が関わる学際的なチームは、両方の学校で社会問題を分析した統計的な調査プロジェクトを行うことができる。

三原中の生徒グループとMMSの生徒グループは、校内暴力に関する一般的な調査結果について、開発的、分析的な手法を使って、校内暴力に対する生徒の姿勢や態度を調べるかもしれない。この調査結果は、Web上で比較し、分析することができる。

また、両方の学校の音楽グループは、同じ曲や音楽を演奏することを学ぶことができる。

両方の学校で美術を学ぶ生徒は、美術の特定のジャンルを研究して、そのメディアについて彼ら自身の解釈を生み出すかもしれない。

双方の生徒や教師は、地球の反対側の姉妹校でなされるそれぞれの取り組みの結果を比較することで利益を得るだろう。同様に、この平行学習には、双方の学校における学習法や教育法に関する文化を知るために深い意味がある。

もし双方の学校の教師が、学習活動を計画するときに注意深くなれば、彼らは学習活動の最後の段階で、パートナーシップに関する課題の反省と成果の共有のために、作業する時間を残すようになるだろう。学習活動の計画に関わるこれらの特別の作業は、お互いから学び合う機会を我々に与えるものである。

校内暴力のサンプル調査の場合を考えるなら、生徒がその問題の解決法を提案し実行するために、生徒はその調査結果を使うように求められる。もし2校の生徒がこの情報を共有することができれば、これらの問題の解決に近づくため、彼らは異なる社会問題、異なる解決方法、異なるアプローチの方法を比較し分析することができる。

こうして我々の生徒は、お互いから学ぶのである。

交流的な平行学習に関わる教師は、教授法を組織編成する過程とプロジェクト・ゴールを実現する過程を共有することで、相当の利益を得ることができる。つまり、教師は、反省し、共有し、質問する機会をそこに加えることで、この方法論とカリキュラム編成を共有し、利益を得ることができるのである。

したがって、プロジェクトのこの段階では、その仕

事を行い教授法を改善するという意味で、この直接参加方式は教師に特別な成長経験をもたらすだろう。我々がこのパートナーシップで互いに提供することができる最も刺激的で、また有益なことは、我々教師そのものと我々の生徒そのものの成長である。

これまでの2年間に、2人の三原中の教職員がMMSを訪れた。過去の2年間に、のべ5人のMMS教職員が三原中を訪れた。少なくとも、もう一人が2002年の3月か4月に訪問するだろう。双方の学校の教師は、このめったにない相互訪問の機会に参加することについて、大いに便宜を与えられるべきである。

三原中においてこの6月に、2校間で生徒の相互交流に関する可能性について議論がなされた。三原中には、将来の交流のために無料の宿泊設備として利用可能な寮(教育実習生のための)があることが話題になった。

MMSでは、SITがこのような交流事業に資金を調達するために、代理店が提案書を作成できるように調査を開始すべきであることがすでに報告され、検討され始めている。三原中においても、人的な直接交流の意義を十分理解して、財政的な裏づけを得るべく各方面に働きかけることが望ましい。費用がかかることで、本来交流に参加するチャンスのあるべき生徒が参加できないような事態になってはならず、あらゆる便宜が図られるべきである。

#### (5) 注意すべき事柄:

パートナーシップを構築するときに、心に留めて決して忘れてはいけないいくつかの事柄がある。

第1に、2校の教職員はそれぞれが共通点や特徴をもっている。MMSの教師は三原中の教師と同じように、個々の生徒の成長や学習に焦点を合わせて様々な支援をし、子どもの人生に大きな影響を及ぼす教育を行っている。一方、三原中は広島大学と相互関係のある研究的な学校であり、附属校の教職員はそれぞれが毎年その研究成果を研究紀要などに公表するために、調査研究にも関心があるということである。

日本の学校にはそれぞれの資格を持つ教職員が豊富に在職し、その教職員は継続的にその職務を遂行している。一方、ノースカロライナ州の東部で表面化している慢性的な教師不足にMMSは悩まされている。そこでは転職率が高いので、ある教師が長期間にわたっ

て継続的に在職することが困難な状況にある。

言語障壁もまた、重大な障害を生み出す。MMSのほとんどの教師は、まったく日本語が理解できない。唯一、選択日本語クラスに時間講師の清塚千穂教諭が在籍している。したがって、日本からの通信はすべて英語を用いて行われなければならない。一方、三原中の多くの教師は、ある程度の英語を話すことができる。そして、ほとんどの者は英文を読むことができる。しかし、手紙などが翻訳されずにお互いの学校に送られたとき、それに応じることが今後の課題となる。言語障壁はまた、教師の交流においても気が進まない状態を作り出す。可能なときにはいつでも通訳者を準備するためのあらゆる努力が早期に行われるべきである。

最後に、お互いの教職員が直接に接触できないときに、このプロジェクトの実現にいくつかの問題が生じることに触れる。まず、最初の問題は、たとえ教師がパートナーシップに興味があるとしても、ゴールがどこにあるのかを知らず、あるいは共に参加することの意味を理解しない状態が起こりうることである。第2の問題は、相互の教師がパートナーシップ先の学校へ訪問するとき、その教職員とのいかなる事前の接触もなく、あるいは彼らの興味はどこにあるのか知らない状況が起こる。また、互いに接触できないことで引き起こされるこの種の事例は、両方の学校の教職員のより広い範囲の交流を妨げることになる。

この問題を解決するために、両方の学校の教職員は、お互いを紹介し合うために教師プロフィール・シートを作成して、交流することが話し合われた。すでに、三原中の教職員のプロフィール・シートが作成されている。そのプロフィール・シートは、オリジナルをコピーした後、そのオリジナルを姉妹校に送るべきである。一旦両方の学校にコピーがあれば、教職員は、共通する興味や、類似点、および共有可能な利益を探ることができる。

教師がこのプロジェクトのためにアイデアを持っているとき、彼は、関係部局にそれを提出することができるシステムを準備すべきである。そしてその部局は、相手の学校との接触を始めることができるようにすべきである。これは、2つの学校の間で交流の記録を維持することに役立つと考えられる。また、プロフィール・シートは、次の教師が姉妹校を訪問するために、関係部局がスケジュールを計画するときに役立つはず

である。

各学校は交流に際して、事前にどの教職員が参加するかを知っている。この情報はパートナーシップのウェブサイトに公開されるべきであり、(情報技術とコミュニケーションの項目を参照せよ)この教職員は相手の学校の受け入れ担当教職員に宛てて、早期に電子メールで連絡を取るべきである。実際、今回の訪問に先立ち、報告者は、M・マットソン教諭と事前に連絡を取り合い、交流に必要な準備をおこなうことができた。こうしておけば、相手の学校に訪問教師が訪れたときに、その学校で費やす時間を最大限に活用できるし、姉妹校は「歓迎」の気持ちを一層暖かいものにできる。

#### (6) 三原中の総合学習とMMSのThematic Unit:

総合的な学習の時間では、(MMSにおいてはThematic Unitが同様の役割を果たしている)日本においても一般的であるように、ノースカロライナ州の教師にとっても、年間指導計画は固定的なものではない。MMSにおいては、教科の授業時間が柔軟に組み合わせられており、2クラス平行の一続きの授業を、2名の教師が交代で担当するカリキュラムチェンジが見られた。また、MMSでは、生徒は履修する科目の教室に、静かに一列に移動した後、授業を受ける。授業中のドアは、閉ざされていた。三原中においては、生徒の授業予定は毎日変わるが、それぞれの教科の授業時間は、整然としかも厳格に50分間が守られている。三原中では、普通教科の授業では、生徒はホームルームに残り、その担当教科の教師がそこに行って授業をする。

日本の中学校において来年度から開始される総合的な学習の時間の開発については、多くの教職員がこの新しい授業がどのようなものかを確認しているわけではなく、総合的な学習というものは、中心となるテーマの周りに編成されているということをおぼろげに教えるなかで何をすべきかということを知っているに過ぎない。一方、総合的な学習は、アメリカの教師にとっては何も目新しいものではない。人間中心の教育運動などにより、従来から認知と情意の統合を念頭に置いたThematic Unitと呼ばれる授業が展開されている。しかし、近年の基礎学力向上の取り組みによる学年末試験で相当のスコアを要求されるようになって以降、こうした授業を展開する教師が減っている。

三原中の教師は、今回のパートナーシップ事業に総合的なプロジェクト学習としてのチャンスを見出している。三原中の教師とMMSの教師は、お互いの文化の間に掛け橋を築くというテーマに燃えているのであり、橋を掛けるプロジェクトにとりわけ興味を持っているのである。具体的には、次の取り組みが準備されている。

#### ① Thematic Unit ; Build the Bridge

2学期以降、三原中とMMSとで、具体的なThematic Unit ; Build the Bridgeを展開するために現在準備を進めている。これは、バルサ材を用いて橋の模型を制作し、据え付けた橋に吊り下げた重りを次第に増やし、最後まで壊れなかった作品が表彰されるというものである。事前に、PCソフトBridge Builderを使って橋の設計をシミュレーションした後、橋の設計図面を描き、最後に橋を製作するのである。この授業には、様々な教科の基礎知識や基本技能が要求され、総合的な学習活動が展開されるであろう。これらは、すべて日米の生徒チームで行われる。競技コンペの結果など学習活動の経過と結果は、それぞれの学校のHP上で公開し、比較分析ができるようにすることを計画している。

三原中とMMSの双方の教師にとって、「今後のタイムライン」に重要な関心が集まっている。交流プロジェクトを計画する場合に、双方の教師は標準的な学習課程のゴールと目的に焦点を合わせ続けるべきである。双方の教師は、プロジェクトの中で次のことを主張している。つまり、このプロジェクトを体験する中で、生徒がカリキュラムのゴールと目的を十分に達成していることを、生徒の変容として証明することである。

#### (7) 技術とコミュニケーション：

学校間でのコミュニケーションは、とても重要である。三原中とMMSとの間のコミュニケーションを推進する上で、すべての役立つ技術を確実に使いこなすためにあらゆる努力がなされるべきである。

#### ① 電子メールやインターネットは、両方の学校で容易に利用可能である。

テクノロジー・コーディネーターは、できるだけ速やかに姉妹校のホームページリンクを開発すべきである。この担当者は、平行学習プロジェクトの結果を比べるために使うことができるウェブページを開発すべきである。これらのページは、Webページへの訪問者

に対して、彼らが見た内容についてコメントさせるようにすべきである(おそらく直接に教師あるいは生徒への電子メールによるやり取りを可能にするべきである)。

#### (8) 交流活動をはじめるとあたって：

##### ① パートナーシップ活動を組織するにあたって

MMSでは強力に動いているSITの一員が座長を務める小委員会を設けることが提案されている。この小委員会は、それぞれの学年レベル、芸術、日本人教師、テクノロジー・コーディネーター、および過去のGPS関係者の代表から構成される。この委員会は、プロジェクトの提案をする受け入れ担当教職員にとって、これまでに得たGPSの情報を広めるのに役立つだろうし、パートナーシップの窓口担当者やプロジェクトの進行担当者を同時に動かすのに役に立つ。教職員の訪問を取りまとめ、歓迎行事を調整することが、この小委員会の任務でもある。

三原中でも、このSITと同様な部局を開発し、具体的な活動を展開することが望ましい。

##### ② 教師のプロファイル・シート

三原中からMMSにプロファイル・シートを送っている。MMSの教師は、同様なシートに記入し、写真を貼り付けた後、SIT経由で三原中に発送する手順となっている。各教師プロファイル・シートのコピーはファイルに保存すべきで、オリジナルを各姉妹校へ送るべきである。これらの教師プロファイル・シートを使って、似ている分野や興味のある分野を探ることである。

##### ③ 橋を掛ける活動に興味と情熱を持っている三原中及びMMSの教師

橋を掛ける活動に興味と情熱を持っている三原中及びMMSの教師を担当窓口にすることが大切である。今後、具体的に学習活動の結果を三原中の生徒と一緒に比べることになったときに、重要な役割を果たすものと考えられる。

##### ④ 生徒によるベンパルの交流活動

生徒によるベンパルの交流活動は、今後も発展的に継続する。

##### ⑤ 音楽授業の交流 (J・ナイトン教諭と桑田教諭)

#### (9) 長期的なゴールについて

双方の学校におけるGPSの計画チームは、長期的な



ゴールについて話し合った。パートナーシップのために長期的なゴールを決めることは双方の学校にとって重要になる。というのも、今後パートナーシップは、学校文化の重要な部分を担うようになると考えられ、三原中の附属学校としての使命を実現する上で、途切れることのないように継続した活動を展開することが大切である。

長期計画のために下記の内容を提案する：

① 視覚芸術：

生徒は、パートナーシップ・スクール活動において通常提供されるアートワークを共有することで、共同発表など、協力的な学習活動ユニットに仕上げることができる。

② 生徒の交流：

人的な直接交流を実現するための資金に関する援助を獲得するため、各方面へ働きかけることは、より多くの子どもや教師がこの事業に参加することを可能にする。

③ 共同作業（研究）に関する調査：

コラボレーション；共同作業（研究）は、これらの相互理解教育プロジェクトのため、あるいは個々の職員の力量を開発するための基本的な指針として役立つものと考えられる。教師や生徒の意向に変容をもたらすような測定調査や、効果的な意思決定モデルに関する調査は、広く興味を持たれている分野である。

④ 学校の所在する地域同士のパートナーシップ

もしも学校段階でこれらの事業がうまくいけば、おそらくコミュニティのその他の要素や課題を巻き込んで、このプロジェクトを全体として支えるようになるだろう。

⑤ ガイダンス記録集「国際的な協力体制に関する意義ある取り組み（仮題）」の発行

これは、成功している（または不成功な）計画プラン、新しく教えている戦略、およびパートナーシップにまつわる努力を通して得た他の情報などを蓄積する場所となり得る。

⑥ メディアセンター内の特別な部署の設置

MMS では、メディアセンター内にこの事業のために特別な部署を設置することが、このプロジェクトに由来する様々な教材資料を保存し、この事業を展開する上で重要な役割を果たすとしている。三原中においても、現在の学校図書館を早急に改組改善し、メディアセンターの設置を推進すべきである。

【今後の連絡のための情報案内】

■学校アドレス：

Martin Middle School  
400E. Johnston Street  
Tarboro, NC 27886

電話：(国コード) -252-641-5710

ファックス：(国コード) -252-641-5713

■学校ホームページ：

<http://schools.eastnet.ecu.edu/edgecomb/mms/home.htm>

■この件で接触した人々：

Mr. Wayne Miller；ウエイン・ミラー  
Martin Middle School 校長  
LLPCHELKArodigy.net

Mr. Marshall Matson；マーシャル・マットソン  
6<sup>th</sup> grade 英語、社会担当  
GPS窓口教師 (2001年9月よりECU大学院へ)  
Toymatsonahoo.com

Mrs. Shawna Andrews；シャウナ・アンドリュース  
6<sup>th</sup> grade 数学、理科担当  
(2001年9月よりECU大学院へ)

Ms. Janet W Knighten；ジャン・ナイトン  
音楽担当

\*窓口から紹介があり、Web上でコンタクトがあった、GPS後任者；

Mr. William Grady

7<sup>th</sup> grade 数学担当 (報告者と3月に会った)